



画

总集

集



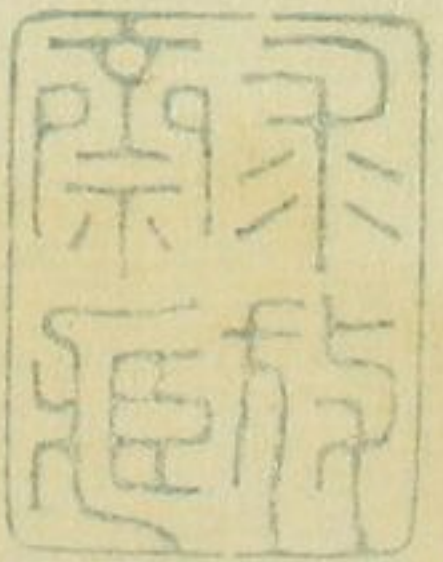
七
卷

中村俊定文庫
 文庫 18
 713
 7





元禄七戌夏



夕のほやつたる時をさる夜中を
あひささそく 萩の下新
ゆりくとゆきと鏡のつれなき
るのまひりハみか 白人きり
そと貴の跡て ぬふふれの日
稗よ穂夢に産の坊をよ

為有
とる成
素斗
鳳奴
とる成
牛

去前も小僧も孫はさしを
 けさる牛と人よきと
 春雨の蹟は新やのくちあけて
 旅の馳走は尿瓶はしと
 あひらりよては 念はとまむ
 そのまに 伊波しき
 めきくと川より定ふもの
 米の味さき けりめい
 月うけようしきの深ふき
 身のまらる 伯耆の入相
 牛 孫 奴 牛 孫 奴 牛 孫 奴 牛 孫 奴

水のみよつち小きあまひ
 去らぬと 芋の粒の穴
 かけらうた 田舎役者の荷の重
 いでのまのし料印を立
 杉の本とすりと風の吹流
 尻もむすまぬ 意うけ
 うとくとおひく君を負歩
 豆腐しりる 忘方の月
 頁しふは 堀あしの考
 合めひらる 芝居の
 牛 孫 奴 牛 孫 奴 牛 孫 奴 牛 孫 奴

踏しつて湯漬りきこむ谷のふ
 師一その伎よこね ぬ ぬ ぢ
 たりくくとふく入くいさきよ
 杉のふらりのたんくくと
 ちー強の懸きさる へん 店
 らまきくくくくめ 赤坂
 雪外ー兼おふの軍一ゆこり
 駿河ーたごのぬ織る 産 社
 新波めくふの新所 柳 二 来て
 各よこくく 柳 一 山 崎
 奴 牛 来 奴 牛 来 奴 牛 来 奴

松風、新酒をよみぬ 来きくふ
 月もくもくく 名 垣 乃 一
 町乃乃門 水 一 一 花 花 花
 まてハゆくこれ 花 花 花 花
 こ十里もは月もまに新くくくと
 この山くうりて 花 花 花 花 待
 唐おさる 花 花 花 花 花 花
 床りあさるをころくくと 判
 支考
 猿 籠
 名 張
 吾 芝
 帳 巻
 卓 袋
 中 袋
 考

乞ひす後 縁しの縁をよふ花く
 唯唯の中をきかす川の
 仁人と 矢橋の舟をのりて
 あつたつと 解乃あつたつと
 せうくと 泣子を流すつと
 大工を根やの帰るつと
 用のおりつと 為と
 雨のつと 口のつと
 きはつと ををむつと 同
 親とつと

考 袋 芝 考 然 袋 翠 葱 芝 然

月つと 又つと 念ん念ん佛
 かつと かつと のつと
 咲つと 毎つと 連つと
 ゆきをつと つと 振つと
 香と 穢のつと 糸と 打つと
 肉 俵乃つと つと
 名 婦れ 門乃つと 入つと
 一 里の 舟も 後つと
 山ハつと 雲 根の色つと
 日なつと つと 富乃つと

考 眞 翠 餅 考 芝 袋 然 餅 翠

幽卷廿

口

おころたをねきて月のあはし
龍のこり。まきまのうら
侍平のあをねりよ 雲の雨
市ふらとほと酒ぐらむせ
小倉とは白い合の下の関
先原の風う人死あれ
ふとさきま日寺の粥くく
遠うけえ坂の音うけ
ぬと今ハすいふうと
あらんのをうらとつらりと飲

芝 袋 紙 考 意 紙 意 考 意 紙 意

混我をうらうとれく青
うけれてくさる。新のふ茶
朝ゆめの湯くうを尼の業
廻ハ——ふハ牛の巻はく
枯もさけあももさき楠の皮
月見うらうはも 遠信で
かもゆりくさる。秋の風
濱の小舟をさる。きり雨
懐う取うらうくくけけ
いろさのふくう白き席考

考 袋 紙 考 袋 芝 紙 袋 考

音悠るるをそのうらぶの枝
根よりけしむよきとれり

芝 敏

那はるるを送る

鳥のれと虹の輝一写の光を
杉のしるををり之日月
磯にさむき木れらと勢よく
ゆーたーのさるのき後

會覚
さる
不玉
為良

此今ら書け人ば一六秋のき
道乃るるしりれ本かきさき
月しる心きまのさほしむのぬて
ちいさくあをさくくあさむ
さきねぬ感を入く花梅く
酒ていしるのさる。後癖
片つめさ白のせきさるり
海一乃るさいよきとれり

七世
泥足
支考
漱刀
之乃
車庸
洒堂
畦止

緑香もまればささの如くも
 えいすの隣りのあゝ二月
 きの若くも 糸はゆるゆると
 うるはしく年に変更する風
 くらりと山田の橋は立松を
 地流れゆるる ぬはぬは
 仁事しれふもはまたゆるる月
 流し池乃ちゆめのとけいといふ
 貴くれ小暮のま川吹まき
 虫侍 けいりうさ 醫者のふま

収
 魚
 足
 真
 庸
 考
 五
 止
 止
 考

一し貴くれば目もまきゆるる
 ぬまふしあをまきゆるる
 次くと廻乃ちゆるる
 何しあもせまにゆるる
 小狭ふゆたれ流るゆるる
 今やこをまきてゆるる

七
 収
 魚
 足
 真
 庸
 考
 五
 止
 止
 考

あゝたまたま 秤に鉛をたけても
袖 よきいさらし 親乃名代
垣廻しふらふらと鹽の粒いすく
善法 のしらほ小屋て火とく
ゆらぬみまをちる家のちちい
海くくいのじ子孫のうらぬ
くれくとも月のむくく杉の表
在法 もゆきく 母志の秋
とけくや 涼くくる者く
彼もたぬら作してく

洒堂 舎屋 何中 庭 雲 竹 川 考 慈 寺

ちまきいともいともえきなるの糸
かゝるく 町の 一歩にきく
ぬいねを横より孫いぬいぬ
— さらよまに 妻の居 榎
あちくくともくくくくくく
音のくく のちくくく
葉くくくくくくくくくく
清くくくくくくくくくく
よ下の橋のちちくくくく
榎田の中くくくくくく

慈 寺 川 考 慈 中 慈

小多ふあひをうらむおまわり
縋の江のくちをうらむ一棧
月もくちをうらむの木のむち
枝一をうらむにわらわ
野のくちをうらむの木のむち
老のくちをうらむにわらわ
解ちをうらむの木のむち
——うらむの積てまわらわ
田の中の——めに流るる水
柳のくち——木をうらむのむち

是 中 川 考 是 然

又月やふくもあはれ夜はは
雲そのせたまは 相若 一葉
朝露小飯たたくまをうらむ
雲もくちをうらむにわらわ
鳥もくちをうらむにわらわ
くちの木のむちをうらむにわらわ

左 柳 一 葉 朝 露 雲 鳥 木 雲

夕わ〜〜庭吹〜〜石の聲
 鹽と〜〜街〜〜栗
 せし〜〜ぬ〜〜栗
 き〜〜れ〜〜栗
 救〜〜れ〜〜栗
 鏡〜〜り〜〜栗
 明〜〜れ〜〜栗
 塵〜〜り〜〜栗
 夜〜〜り〜〜栗
 たら〜〜り〜〜栗

花乃〜〜と〜〜栗
 花の〜〜を〜〜栗
 花雨は〜〜栗
 花〜〜い〜〜栗

や〜〜わ〜〜栗
 結〜〜の〜〜栗
 宵の〜〜月〜〜栗

栗

意風やまのちりふのき
くけきふいちふれ糸口
木尊
七世

如行。白茅子孫おせし時

霜雪ふく徳兼み故屋をよせし
古人、やうれおの本
如行
七世

秋乃雪の起しゆのふやう
萩のわらふ、くふふふふふ
本園
七世

早今宵ゆふ約筆てとゆは
いろきそくふくうり此米
ゆ〜あゆふいう〜布指く
右雪
常段
七世

此身十三年形

静く息く小枝ふふの唇を深し
雨のあつりれ日まのこつなり
糞を引ききかき〜ふふのこ
一ひ〜〜〜人かれて起
更也
良
真
雲

金止や傳下に砂を敷く
科一乃むしを抄法の後
うふ事一此百に意のあそとて
人いうしきと一此きり
松栢意くわし一のきり
子を射しきる。猪乃成
後以者や被をぬり視
從古の月 心一同た
松皮ひく充れ政の好
しられて意のふし牛

右也 意 良 雪 意 右 也 意 重

冷涼の孤村の夕やう
ししつれさしれ中流
ししきし地蔵の孫ふ
鐘意なまよしとれま
做借を尋てくれ乃
才木をとりさく梅

也 右 良 雪 意 良

夏草のあつ

夏草くあつあつ
まよりてくやん

意 良 雪 意

賀彩完

新 彩 や 花 よ り け ゝ 宵 戸 の 樂
 蘇 け ゝ け ゝ 也 ぎ け ゝ け ゝ け
 投 け ゝ け ゝ ぬ の わ け 橋 音 こ け け
 風 名 た き け け 月 の け け け
 杉 垣 の け け け け け け け け
 け け け け け け け け け け

雪 芝
 七 世 儀
 去 昔
 風 芝
 玄 虎
 若 藤

新 彩 や 花 よ り け ゝ 宵 戸 の 樂
 蘇 け ゝ け ゝ 也 ぎ け ゝ け ゝ け
 投 け ゝ け ゝ ぬ の わ け 橋 音 こ け け
 風 名 た き け け 月 の け け け
 杉 垣 の け け け け け け け け
 け け け け け け け け け け

雪 芝
 七 世 儀
 去 昔
 風 芝
 玄 虎
 若 藤

蝶草を日利乃くらん行きて
ほろとて尊き 門乃窮くも
大木れ梢を枝のちむさり
野よまはにほくこひ儀物
山伏よつひあつてあてれ配る
一里たりとも 高きもる。旅
舞とのく布袋の息よ月片く
石のやいとに おかしくす
松風の雨ほらくと川のよ
くらあふ舟をえあつるなり

蕙 芝 麦 菴 菴 菴 菴 菴

英漢山を流るん乳の噴掛ひ
とてしすのぞく ちれのけれ
平よ日れ西よりくさる 切目極
あふれよわく雨の——流る
乃くれぬやうくくはむぬれがさ
ほよたくとけくはむぬれがさ
き竹の枝の節むむ老のわさ
——ぬ山強をこらにるせて
きくくくし 寺をくくくく
すさのくりにすくく物

蕙 菴 菴 虎 菴 菴

むけられや月よ静しく人よれ
路艶乃いづれをくさる米椀
さひまる ぬまり 淡流さうけて
白い下る戦を志高く移して 報

芳 穂

麦前くよきと隠れおや 島む
あを けりりた 松 さくさり
屋のを登ふ心火のぬきうく

と成 越人 中仁

めつ〜 や落葉ふ入る 露草
法師乃新と多れ ちる梅
沖車れ〜くく ちる雪ふて
新をたりのい〜川 けり月
矢中れ勢うけう かつよ新の風
か〜この春 くるりこの春

如風 七世 安伝 重辰 自矢 志之

田植の日よりとてめあれたるよ
うくわりのまじけりたれたれに

穂了る母早苗一色む食む甚

いよみの物くやあやめとてすれ

夏川乃ま川の青き探りけて

あさこの宿を尋ねしれちるにとて

尾のありし何れ何とて人けりま

源やうを赤なまひなりつてま

市のまよも乃ま名たる細布

日面ふままよもまよも

曾良

七世成

管齋

曾良

曾良

七世成

一ろもに鈴をさせ霜衣の終

一羽まつたれくちりり一じれ

枯草にいさく松のふしりて

田中け今ちのまらりくれは

月ほろく母のまよもまよも

秋う智のほろく門のほろく

霧のた糸糸をまほろく換のま

雨まほろくまよもまよも

松江

七世成

曾良

依こ

泥芥

水藤

風泉

夕葉

白卷七

十五

松より女わきしけ情あて
似蝶しけをくらけ明けの
松翠 松子

——れくに鐘より響ひまの鐘
春白

火燈の——くに籠と次色人
こせ

松風ふれし鳥野を人の——て
溪石

物まはらふふ海の心の月
二秋

待もつふふ秋の影
其角

音の絶れしやうけり
卜千

孩子をよむる家の名をとけ
嵐雪

餅 二つとひえきうふ
白

岩急のそまに子れ日の松む
意

旅や——あらうららする言
石

雨もれて雲れふらく見えれ
松雪

いつれ乃とらく唱うつる
雪鳥

夕幽冷ふ影をみ面は月か
七世

秋来ふらとと布たさるる
常照

さる久、南戸うふく

落葉をわたさくの高の河も
木の葉をさのうく短衣の雨

とせ成
曾良

細川青房をふく

桑園小いつれ乃糸を草枕
秋のほそくれをわけけし月
燈のほそく夕を梅のいせとて
さるのやわけけしき教乃下

とせ成
栞雪
更也
与良

風流き

水の奥むしらるる 柳水
ひさしほくさ 橋のせき
風をさす 的のうれ美く悠悠と

とせ成
風流
夢成

整信き

風の音も南にらりし流上川
小舟北野を流ふ夕下ち
物もななく棟ハ亭よ切れて

とせ成
柳風
本端

さきさきあはく

涼しきや海に入らぬと川
月とゆりき浪のくさ海松
馬鴨の飛び居のさあきく
禁はるうたうじともしき
掩とられ形変化く市と信
つけにまうする 宵のあは火
ふ枝燈のうらうらとさささ

とを
令道
不玉
定達
尊良
仁定
扇風

松杉よりいあけつるみそれ
うらうらとく 夏
ゆきゆきにけりるおの丁子風
昔は 雨 減も ぼふふのうら
吹られてはハをうりの月丸く
枯とあつて のほらとつ 汐
いづし 細平地を 暮のまをい
あまのあつてに 入を 何ゆ

去来
許六
とせ
予良
千那
来
と
存

神のたはれと比ふはむい

那 良

折くやる産る萩のき

吉芝 長

右の笠のちうとて

月やそ洋の本れ日の下
旅人きれハ 折るのき
あまに由文のしにきて

と世茂 吉圃 吉角

壬申 早暮

世の中をいふはて
しそくく先

小竹城のこまきんとのき
及中よりに後乃 甚き
吹すうは積のむにれきみて
りゆさうらよなるはうつよ
舞臺をむうつに録く市の中
毎も 身中一 如師のゆふ

其角 漢石 と世茂 吉圃 史邦

物すくくたる子橋の朝風

大草

うやまうやま世れおの山あぐ
雪まぐのこれほろぬ大根
人そ乃天急うくま風う

去来
句堂
さき

胡蝶みしうそ秋さ茶葉か
たははひりくかき一もを

如行
く色紙

茶根と喫く

丈夫と後張は

ものゝおの大根くさくお
一とほりりし本くさの
おるくおりぬ 残を甲うて
大はよよとひる 古はおの内
おのまおのすおおそくて月のま
一 情とんをくくさく

と色紙
玄唐
赤林
菖
唐
亦

幽卷七
二

いづれよと新白牛とく川一夏
 携てよわたり 折るくしの松
 とくさつるちよと髪を束せんと
 携りてよまを やつす新白
 志ろくよと懐くん 月ハ海
 下よ携てよくは まよと
 本くくくくくくくくくくくく
 何れよふのくくくくくくくく

羽笠 若兮 市子 杜心 七世成 中水 親外 七世成

何れよと武蔵中の月影
 水ねゆり 七世成の友
 名いよとくくくくくくくくく
 志ろくくくくくくくくくく
 携てよくくくくくくくくく
 蝶ねん為 探千の友
 携の本のふよとくくくくく
 泉すくくくくくくくくく

寸木 七世成 若兮 超人 落橋 杖芽 七世成 杖尾

そ達のりつうしねぞんま中の

入はしつとまのきよきく

深川かすしれ後のもせなうそ

らるのこくけいしつのみ

神宮のはらけの布の日和とて

新時月のこやことく

牛とくさくはくはまのるあさ

凡瀑

とせ成

右江

此花

虚洞

残衣のぬきしきむぬの花

すそくえくむあのみまぬも

酒よりおきけ挿し花ぬく

板屋くのよしるしりく

夕ぐれの日と傘と干しておく

るよ 名紙を行そけい

い末翁の白のききく

掃つるのきくくはハ筆扱て

とせ成

乙春

一有

杜玉

宿彦

善哉

中一のうられけ地をりく

海

夕よ加をとりる 子やこ人

海

翁ととらふのまじらと嬉し

汐ハ千して 柳よ舟く 此岸の岸

海

日よくたつる 泉と若いく

乞食をとり 橋の本の中

海

解して 鬼なつて 此岸をり

月あのかききと 候はれ作り
ハマよまの子の 歌 尾けり

海

糸 冥てら 別 替る 月 見ら

とを成

杖のわく 一に 急 荷つれ ち

睦止

泉のわく 地ハ 刈 けり 花 咲く

惟光

いつし の とき 心の中 後

西堂

此の よう しく とも とき あり

支考

枝の枝をわうしるさ ーり
津川よつげを登を引てる
火のとりりたる亭のつとら
毎 青森

ひそき

村の心衣よ 桑りてわる
娘とりの女斗く 坊とわけ
毎

暖よ 溪の岸師もぬらけ
糸をたてて糸は 桑りて
毎

糸一橋のくる 山川の末
大根もろろ 根よろて 踏を
毎

地の ーろろ 根 ーろろ 踏
踏の ば中 ーせて 一 踏 踏
毎

樹でと 桑は 尻 尻の ーと 尻
杖と ーろろ 杖 杖の ー 杖
月之 影と 沙川の 影も 影と 影
毎 毎 毎

空を舞のまわりもわりやいけを
きりー死る 小豆の 蝶
月もまじり青りくるとつれて是

舞六

小豆

蝶

いろくのちもさ情や 是のち

情願

くくられて 蝶のゆめハさあや

蝶

かき序りののちた面を片りや

序

玉灰や文も読もたれとれと

報人

書を定食意はねてくくはるん

叙

海をのまき 録をつくる 貝吹く

録

脊をとり すまに後こそは垣

人

おろむむ はる月とたて少や

照

是々まの 首をを 色んせさ守

意

海をなまやと定くま

貴族をうれはと袖もろろは

写

張りのー 母をくはるあ

張

今宵のこぼるる小舟の影を舟きり
舟のこぼるるに舟と舟の影と

寂照
望水

ささるる波のこぼるる舟の影

舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟

舟の影
舟の影
舟の影

舟のこぼるる舟の影の舟

舟のこぼるる舟の影の舟

舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟

舟の影
舟の影
舟の影

舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟

舟の影
舟の影
舟の影

舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟

舟の影
舟の影
舟の影

舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟
舟のこぼるる舟の影の舟

舟の影
舟の影
舟の影

一うれてやふさくあはれ木立
高れふ時をともむるわら卓

尾花
七世

月と花をぬれたりのうらみ
いはら乃くくたに身を入るる

秀治
七世

やうくくたにたきこころは花妻
田くあくくも小籠をのり起

秀川
七世

梅くやとほりさしと馬の音
ととく 嫩くくむとくし物れ
くけくくく 翠のくの半の枝捨て

七世

古池やくくつあつむく水く音
けくくのくくく 子臨の糸

七世
其角

再讀雜

糸くくく入乃海くく心
ととくくくく 云あれ振華

孫頃
七世

あつては立圃を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
能くを母とゆへたるは

能くを母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは

立圃
去来

あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは

素巻
去来

あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは

去来
浪化

あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは

去来
正秀

あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは
あつては白を母とゆへたるは

去来
快哉

兼たひほりてのほりわ夕涼
ほりて少りけりあちきあのみ
曲登
とを成

吾れよ川をれよ川はたきし
口乃もさよ人のあきさきさき
孤登
とを成

物とて藤りさく列一取
さきさきさきさきさき
とを成
少枝

舟のさきさきさきさきさき とを成	船のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成	舟のさきさきさきさきさき とを成
---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------

幽卷七

元禄七甲戌歳

筆を立や象中一此此ハ早月如
筆 如梅を 下 じ 国紙
よも雪を道乃まおゆこく
山をさへしれ ゆめこれの所
心の中を身を捨てて鳴る川
故や孝之居千以秋あまなり
宵月ふすれよ精のま居と抱
帆を八合ふ舟のの部

其角
女我
岩飛
松風
彫棠
横儿
とせ成
仙化

水よりきりわたりははの香
ほりまわれていけぬ人
あふりとなつてはる文とふて
名時 一 中ハ ともなつしき
あさハまあるけろよの石
出代の花あさくさうとさきた

とせ成
許六
大孝
とせ成
とせ成

うらあゝ杖つふ坂と暮るゝれ
角のとゞけぬ 斗もみまの

と世成
去茅

ひよらうくと程あけやちまむ
らんまやくひより 船の月

と世成

市人ふいくそくしんちの香
酒の戸にく歌のうれ梅
朔うけはとく母衣をいせく

と世成
抱月
梅園

梅やーきのふヤ花とぬけり
杉葉ーし芽丁も牛二るる

と世成
秋風

と世成ゆふとく白よ子語語よー
月とみまよと酒の乞食

孝下
乞

梅野の角そく芋はふとく白よと和
若くあゝきむあけりるゝハ秋のれ
と世成とまよふ 風の被笠

去秋
取

花の後身ふくく 店の前うね
嬉しくほくく 壺のうらたれ
跡延 翁

師の所くむく 拾ん本のもふ
すくくくく 一の巻に十一
塔山 翁

能程に積りれる 夕のく巻
みくくのくくく 風も終く
本因 七巻

真喜のけく 壺田の結た結て

井おの系店く 休くく

くくくく 梅く餅く 今くく
去るくく 梅くく 大根
七巻 相き

くくくく 言れあくく
本のもふく 巻を 吹かく
くくくく 積りる 音のくく
くくくく 伯母のくく
七巻 相き

菊の香のつゆとてまじりて

松の香といのちのやうりぬ 相違

稲一つりぬ きはくもり とも成

いぢさしはきんまごころぬ とも成

硯のみのこけぬ 朝野 左足

同葉の枝はくぬ 朝野 如風

二十五年のりぬ 朝野 聖人

あのおおりのりぬ 朝野 支考

うやほしき結もやうくけ比 朝野 朝江

おとひま 本音やに月のほく持 とも成

糸の杖つく 徳の友 東菴

牛の子れ乳とのむけ 実りて 桂楫

ひけろよとよむ 竹の 編柳 町塔

院つも葉の迷 細りあり 相違

いぢさしはきんまごころぬ とも成

おとひま 本音やに月のほく持 とも成

糸の杖つく 徳の友 東菴

牛の子れ乳とのむけ 実りて 桂楫

なまけの市に上の鮫
常川宿の馬戸より来たて
よせ給 車のみき
楫 水

け酒に草鞋袴む 笠
むくもさし
本
ま
ゆる
三山

箱幻燈房をめぐりて

歌ふたふたあつて

水仙や 白く 障子のま
炭のやとより 町の
膏の月舟を 街に
くくくと 鳴る
初わ
都 盤 判
猿の意 所
又

物なきふねの折くよ目をさへし
こりれぬやうにささめぬ
蒼きまをかりぬ涙をさへ山
時互しそひくおきりちりつよ

判る
裁人
相^と改^高
執事

其のあつこに草鞋をさへく

相^と改^高とあつこ

あつこさへく

牡丹葉とて遠くしらぬ名は
くまの森のまをと指し此のまはりぬ
とあつこ

と改
相^と改

物白の部

物なきまをさへく
折れたるまをさへく

と改

酒と具あつこ
ぬけりぬ父の一齒の能くも

とあつこ

之所^とあつこ

板の凡れ 三つ〜

三

小僧〜

朝露の結〜

糸急〜

まじり〜

考と 切〜

空あり〜

他あり〜

更級の〜

人々の〜

花ハ〜

ほんと〜

埃ふ〜

枕をくぐり経る人の足音は
既覺つききくきくきくけい
きん

踏張りたるあさき 石井
夏ふく徳吉くとあけの
刺しけりあけのふくむれ

深はあけけり 猫の舌白
人しあけと巨燈よれ合
脚をのり殺け指しけり

葎の難よ 老ふあけ
老のあけふの街やと深きけり

おまきりあけの あけけり
石けりよ細き小籠とあけけり

夕くほくきく ちあけけり
枕の本に鶴をくくちあけけり

香山やわ〜の心やい山か
るよと磯ふ〜か〜られつ

とて

蝶をよのろをひひかえり
白の人と中事なりの

清〜くもた〜し寺
物〜は〜小松よ〜の〜

は〜と〜る〜布のあ〜り
大和路〜入りの〜も〜

角〜きのあ〜。〜。秋立
きの〜きふ〜は〜の〜

を〜毎とた〜。〜。くれ
宋女石の玉の〜の打岩れ

寛政十一年

己未晚冬

暮雨菴藏版



四十終

製本所

尾州名護屋本町壹丁目

風月孫助



